

そう だい せいしよ かいしゃく
総題 「聖書をいかに解釈するか」

だいじゅういっか せいしよ よげん
第11課 聖書と預言

てらうちみつかず
寺内三一

いち あんそくにち ごご こんしゅう
1. 安息日午後：今週のテーマ

せいしよ かみさま とくちよう てんちばんぶつ そうぞう かみさま つみびと すく あい かみさま れきし しはい
聖書の神様には特徴があります。天地万物を創造される神様、罪人を救う愛の神様、歴史を支配なさる

かみさま えいえん ぞんざい かみさま しょうらい できごと にんげん よげん かみ れいかん う かみ
神様、永遠の存在である神様、そして、将来の出来事を人間に「預言される（神の靈感を受けて、神の

つ お告げとして話される）」神様です。

せいしよ じゅうよう たいせつ わたしたち じ こにんしき じぶん なにもの おし
聖書は重要（とても大切）です。それは私達のアイデンティティー（自己認識～自分が何者なのか）を教え

てくれるからです。また聖書の預言も重要（とても大切）です。それは、預言により将来を知る事によって～

しょうらい そな いまに よ じぶん い かた しめい いのち つか かた めいかく
将来の備えのために今何をしたら良いかという～自分の生き方（使命～命の使い方）が明確になるからです。

また、預言の重要さ（とても大切なこと）は、聖書に預言された事が、その通りに起こった時（預言が成就

した（書かれた通りになった）時に、預言を与えた神様を信じるようになるためです。信じる者は永遠の命

う こと
を受ける事ができるのです。

そのため大切なのは、預言を正しく解釈する（理解する）事です。間違った解釈（理解）をしてしまうと、

まちが い かた せいしよ ただ かいしゃく りかい わたしたち じんせい えいえん いのち さゆう
間違った生き方をしてしまいます。聖書の正しい解釈（理解）が、私達の人生だけでなく永遠の命をも左右

する（変えてしまう）のです。

せいしよ よげん かいしゃく りかい か こしゆぎ みらいしゆぎ りそうしゆぎ れきししゆぎ かいしゃく りかい
聖書の預言の解釈（理解）には過去主義、未来主義、理想主義、歴史主義などの解釈（理解）があります。

しゅうきょうかいかく じだい かいかくしや きょうかい こうぎ よ
宗教改革の時代の改革者たち（カトリック教会に抗議〈プロテスト〉をしたのでプロテスタントと呼ばれた

ひとびと れきししゆぎ たちば きょうかい たちば
人々）は、歴史主義の立場をとっていました（SDA教会もその立場です）。

れきししゆぎ たちば せいしよ なか もくしろく か おな しゅほう かた れきししゆぎ
それ（歴史主義の立場）は、聖書の中のダニエルや黙示録を書いたヨハネと同じ手法（やり方）です。歴史主義

者^{しや}の手法^{しゅほう} (やり方^{かた}) は、過去^{かこ}の歴史^{れきし}が現在^{げんざい}に継続^{けいぞく}して (つづいて) つながっている事^{こと}を認^{みと}めて、さら^{しやうらい}に将来^{しやうらい}にも

漸進^{ぜんしんてき}的に (すこずつすすんでいく) という理解^{りかい}をしています。

今週^{こんしゅう}は、歴史主義者^{れきししゆぎしや}の預言^{よげん}解釈^{かいしゃく}の (理解^{りかい}する) 中^{なか}でも特に重要^{とくじゅうよう} (とても大切^{たいせつ}) な点^{てん}を学^{まな}びます。そし

て、歴史^{れきし}の中^{なか}に神様^{かみさま}の預言^{よげん}が確^{たし}かに成^{じょうじゆ}就^かして (書^かれた通り^{とお}になっ^{こと}て) いる事^{こと}と、SDA 教会^{きやうかい}の先人^{せんじんたち}達の再臨^{さいりん}

運動^{うんどう}の中^{なか}に働^{はたら}いた神^{かみ}の摂理^{せつり} (世界^{せかい}を導^{みちび}き治^{おさ}める神^{かみ}様^{さま}のご意志^{いし}・恵^{めぐ}み) を学^{まな}びます。

そして、私^{わたし}達^{たち}が、キリスト^{さいりん}の再臨^{きぼう}という希望^{とき}の時^{ちか}が近^{じだい}づい^{つみ}ている時代^よ～罪^おの世^{さば}の終^{とき}わり^{ちか}の裁^{さい}きの時^{とき}が近^{ちか}づい^{ちか}て

いるという厳^{げん}肅^{しゆく}な (気^き持^もちが引^ひき締^しまるほど重^{おも}々^{おも}しい雰^{ふん}囲^い気^きの) 時代^{じだい}～を生^いきている事^{こと}を学^{まな}びます。

※預言^{よげん} (神^{かみ}の靈^{れい}感^{かん}を受^うけて、神^{かみ}のお告^つげと^{はな}して話^{はな}されたこと)

2. 日曜日^{にちようび} : 歴史主義^{れきししゆぎ}と預言^{よげん}

SDA 教会^{きやうかい}が預言^{よげん}に用^{もち}いる (神^{かみ}の靈^{れい}感^{かん}を受^うけて、神^{かみ}のお告^つげと^{はな}して話^{はな}されたこと) に使^{つか}う) 基本^{きほんてき}的^{しゆくほう}の手法^{しゅほう}

(やり方^{かた}) は歴史主義^{れきししゆぎ}と呼^よばれるもの^{せいしよ}です。それ^{しゆくほう}は、聖書^{たいせつ}の主要^{よげん} (とても大切^{たいせつ}) な預言^{よげん}の多^{おお}くが、歴史^{れきし}の切^きれ目^めの

ない直^{ちよく}線^{せんてき}的^{むかし}な (昔^{つづ}から続^{れきし}いている歴史^{なが}の) 流^{なが}れを～過去^{かこ}から現^{げん}在^{ざい}～現^{げん}在^{ざい}から未^{みらい}来^{らい}へたど^{かんが}っているという考^{かんが}え

です。聖書^{せいしよ}そのもの^{れきししゆぎ}が歴史主義^{しゆくほう}の手法^{かた} (やり方^{よげん}) で預言^{かいしゃく}を解^{りかい}釈^{しやく}して (理解^{りかい}して) いるのです。

問^{とい}1 に、歴史主義^{れきししゆぎ}の聖書^{せいしよ}の例^{れい}としてダニエル書^{しよにしやう}2 章^おのネブカドネツアル王^{きやうぞう}の巨像^{ゆめ}の夢^かが書^かかれています。

ダニエル^{かみさま}が神^{しめ}様^{さま}から示^{きやうぞう}された巨像^{ゆめ}の夢^かの解^{かい}釈^{しやく} (理解^{りかい}) は、

1. 金^{きん}の頭^{あたま} (第^{だいいち}1 の国^{くに}) は、ネブカドネツアル王^おのバビロニア王^{おおく}国^{みやこ} (都^{みやこ}はバビロン) です。

2. 次^{つぎ}の第^{だいに}2 の国^{くに}は、銀^{ぎん}の胸^{むね}と腕^{うで} (メディア^{メディア}とペルシヤ) です。

3. 第^{だいさん}3 の国^{くに}は、青銅^{せいどう}の腹^{はら}ともも (ギリシヤ) です。

4. 第^{だいよん}4 の国^{くに}は、すね^{てつ}が鉄^{あし}、足^{いちぶ}は一部^{てつ}が鉄^{あし}、一部^{いちぶ}が陶土^{とうど}でできています (ローマ帝国^{ていこく}・異教^{いきやう}ローマ)。

これら^{くに}の国^{くに}々^{きやうぞう}は巨像^{からだ}の体^{あたま}の頭^{さき}からつま先^{かくぶん}までの各^{あらわ}部分^{れんぞく}で表^{あらわ}されて、連^{れんぞく}続^{ぞく}してつな^{つな}がっているのです。



ダニエル書 7 章と 8 章では、2 章の 4 つの連続した国が特定の獣の象徴（具体的な形のない考

えや感じを夢・幻などを見せて表すこと）であらわされ、次々と途切れずに続いています。それらは

現在の私達にとっては、大昔に始まり、現在に、そして未来のキリストの再臨と神様の永遠の王国へとつな
がっていきます。

問2に、イエス様は「事が起こったときに、あなたがたが信じるようにと、今、その事の起こる前に話しておく」

(ヨハネ 14 : 29) と言われました。預言の機能(働き)は、預言がその通りに成就する(書かれた

通りになる)事で、預言を語ったイエス様を信じるようになるためなのです。

※預言(神の靈感を受けて、神のお告げとして話されたこと)

3. 月曜日: 1日=1年の原則

歴史主義の解釈(理解)の鍵の一つは「1日=1年の原則(基本的な決まり)」です。多くの人がこの原則

(「1日=1年の原則(基本的な決まり)」)をダニエル書や黙示録の時間に関する預言に適用して(使って)

きました。その根拠(元の理由)となる聖句は民数記 14 : 34 です。「あの土地を偵察した四十日という

日に応じて、一日を一年とする四十年間、お前たちの罪を負わねばならない。」この言葉の通りにイスラエルの

民はその後 40 年間荒野をさまよいました。

時間の預言に「1日=1年の原則」を用いる正当性(正しいとすること)を説明するための3つの要素(こ

と)があります。

第1の要素(こと)は象徴の使用です。獣や角を象徴的に用いて(具体的な形のない考えや感じ

を夢・幻などを見せて表すことを使って)国をあらわしていますので、時間の表現(表し方)も象徴

的(具体的な形のない考えや感じを夢・幻などを見せて表すこと)に理解されるべきだからです。

第2の要素(こと)は長い期間になる事です。預言の出来事や国々の多くは何世紀もの長期間になります。※

預言を文字通りの日数ではなく「1日=1年の原則」を適用する(使う)と正確に時が当てはまります。

第3の要素(こと)は特別な表現です。預言の期間を示す特別な表現が用いられて(使われて)いる場合は

しょうちようてき かいしゃく ぐたいてき かたち かんが かん ゆめ まぼろし み あらわ りかい
象徴的な解釈 (具体的な形のない考えや感じを夢・幻などを見せて表すことによって理解

する) と考えられます。例えばダニエル書 8 : 14 の「日が暮れ、夜の明けること二千三百回」は通常の

2300 (にせんさんびやく) 日と違う特別な表現 (表し方) をしているので、期間も象徴的に解釈 (具体的

な形のない考えや感じを夢・幻などを見せて表すことによって理解) して2300 (にせんさんびや

く) 年と理解すべきです。

しよきゆう にじゅうよん にじゅうなな ななじゅうしゅう よげん あぶらそそ きみ すく ぬし どうらい う
ダニエル書 9 : 24 ~ 27 の70週の預言では「油注がれた君 (救い主キリスト) の到来 (生ま

れる) まで七週あり、また六十二週あって」と書かれていて、文字通りだと、7週と62週を合わせて

ろくじゅうきゅうしゅう 69週 (483 <よんひやくはちじゅうさん> 日 : 1年4か月と1週間) と理解しようとするこの預言は

いみ ななじゅうしゅう 70週の490 (よんひやくきゅうじゅう) 日を490 (よんひやくきゅうじゅう) 年とすると、

すく ぬし どうらい しよりん じゅうじか とき せいかく あ
救い主キリストの到来 (初臨) と十字架の時がきわめて正確に当てはまるのです。

よげん かみ れいかん う かみ つ はな
※預言 (神の靈感を受けて、神のお告げとして話されたこと)

70週 × 7日 = 490日 → 490年

4. 火曜日 : 小さな角の正体を明らかにする

プロテスタントの改革者達は (SDA教会も) ダニエル書 7章 8章の第4の獣から生じる小さな角

の勢力をローマカトリック教会とみなしてきました。理由は共通する7つの特徴があるからです。7つと

は、いずれも～

①角と呼ばれ～

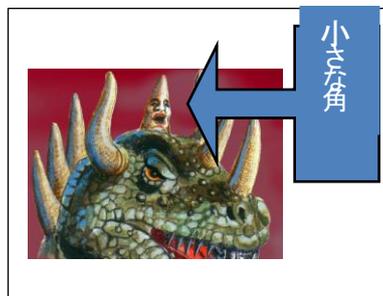
②迫害する勢力～

③高慢で冒瀆的～

④神の民を標的にする～

⑤その活動が預言され～

⑥時の終わりまで存在する～



⑦超自然的な形で滅ぼされる～

この7つです。

このダニエル書7章の小さな角は、第4の獣から生じて、第4の獣の一部としてあり続けます。異教ローマ（ローマ帝国）から出てきて、少なくとも1260（せんにひやくろくじゅう）年間、その政治的宗教的影響を与え続けた勢力は、教皇制ローマ（ローマ・カトリック教会）です。その理由が4つあります。

第1に、「十人の王と異なり」（ダニエル7：24）とあるようにヨーロッパの10部族の中で独自性がありました。

第2に、「いと高き方に敵対して語り」（同7：25）とあるように、イエス様の役割を奪いそれを教皇に置き換えました。

第3に、「いと高き方の聖者ら」（同7：25）を迫害しました。

第4に、安息日を日曜日に変える事によって「時と法を変えよう」（同7：25）しました。

5. 水曜日：調査審判

今週のこれまでの預言の解釈（理解）は、1500（せんごひやく）年代からの宗教改革以来のプロテスタン

トの歴史主義者達に支持されてきました。SDA教会が強調している、2300（にせんさんびやく）（日と調査

審判（再臨前審判）の預言が深く研究されたのは、1800（せんはっぴやく）年代初めの再臨運動からでした。

小さな角（ローマ・カトリック教会）の中世の時代の神の民への迫害期間は1260（せんにひやくろくじゅう）年間で、教皇権の確立（538〈ごひやくさんじゅうはち〉年）から、教皇が逮捕、投獄された1798（せんななひやくきゅうじゅうはち）年までです。その後、ダニエル7章と8章には裁きがあると書かれています（裁き主が席に着きダニエル書7：10）。これは、1798（せんななひやくきゅうじゅうはち）年のあとで、再臨の前に天で行われる裁きです。

この再臨前の裁き（調査審判・再臨前審判）は、ダニエル書8：14の聖所の清めと同じ事を語ってい

ます。この再臨前の裁き～聖所の清めはいつ始まるのでしょうか。それは「日が暮れ、夜の明けること二千三百回」

とあるように2300（にせんさんびやく）日後で（1日＝1年の原則で）2300（にせんさんびやく）年後です。

2300（にせんさんびやく）年の起点は、ダニエル7：24（70週の預言）に見いだされます。多くの学者は、2300（にせんさんびやく）年の預言と70週の預言を一つの預言の二つの部分であると理解しています。

ダニエル9：25にこの期間の始まりが「エルサレム復興と再建についての御言葉が出されてから」であると書かれています。

エルサレム復興（力がなくなった町が再び元の栄えた状態に戻すこと）と再建（壊れた建物を建て直すこと）の言葉は、アルタクセルクセス王の第7年（エズラ記7：7）で紀元前457（よんひゃくごじゅうなな）年です。そこから2300（にせんさんびやく）年後は、1844（せんはっぴやくよんじゅうよ）年になります。

その時、イエス様は天の聖所に入られ、真の大祭司としての執り成しの働き、つまり天の聖所の清めを始められたのです。この裁き（調査審判・再臨前審判）が終わると、再臨があるのです。

それ（裁き〈調査審判・再臨前〉）がいつ終わるか、いつ再臨があるかは分かりません。その意味で（裁き〈調査審判・再臨前審判〉）が終わり再臨がいつ来るかわからないという意味で、私達は日々厳粛な（気持ちを引き締まるほど重々しい雰囲気）の時を過ごしているのです。

し おもおも ふんいき とき す

※預言（神の靈感を受けて、神のお告げとして話されたこと）

6. 木曜日：預言としての予型論（特別なルール）

聖書に予型論があります。それ（予型論）は未来に起こる大きな事実を示すために、その出来事の前に予告として起きる出来事があるのです。予型（予告・影）があつて、対型（原型・本体）があるのです。

問6に、旧約時代の出エジプトの時に神の御心に適わなかった人々が滅ぼされたのは、後の時代の人々を戒める（注意する）前例（警告）として起こったというのです。

問7に、「ヨナが三日三晩、大魚の腹の中にいたように、人の子（イエス様）も三日三晩、大地の中（墓の中）

にいる」(マタイ12:14)と、イエス様ご自身が、ヨナの経験と関連させ、ご自身が十字架後に墓の中におられる事を預言しました(神の靈感を受けて、神のお告げとして話されました)。

レビ記16章の、一年に一度の大祭司による地上の聖所の(罪の)清めの贖罪日と、ヘブライ9章の、真の大祭司としてのイエス様の聖所の清めは、地上の聖所の清めが予型(予告・影)であり、天の聖所の清めが対型(原型・本体)である事を示しています。いずれの場合も、イエス様も聖書記者も、予型と対型を適用して(使って)、預言(神の靈感を受けて、神のお告げとして話されたこと)の重要性(とても大切なこと)と確実性(確かで疑うことがないこと)を際立たせています(ハッキリとしています)。

7. 金曜日:さらなる研究

ガイドには、ダニエル書7章と8章の対応表があります。これにダニエル書2章の巨像の国を加えて対応させると(金の頭がバビロン、銀の胸と腕がメディアとペルシャ、青銅の腹とももがギリシャ、鉄と陶土のすねと足がローマ)~まさに「三重の預言」となり、さらに聖書の預言の確かさが確認できます。三度書かれていますという事は、重要(とても大切)であり確実(確か)である事を強調しているからです。神様が、三度も伝える程にこの預言は重要(とても大切)です。私達人間の一人一人が永遠の命に救われるか、もしくは裁かれて滅びるかの問題だからです。私達一人一人を罪から救うために、永遠の命の祝福を与えて下さるために、人となって下さり、十字架で命を投げ出して下さり、今現在~天の聖所で真の大祭司として執り成して下さっておられるイエス様を日々思い浮かべて歩んでいきたいと思ひます。イエス様の再臨を待ち望むアドベンチスト(再臨信徒)として歩んでいきたいと思ひます。

神様、イエス様の救いと助けと導きを喜び感謝しつつ、神様イエス様に喜ばれる者として、隣人に喜ばれる者として、神様を愛し、自分を愛し、隣人を愛する者として歩んでいきたいと思ひます。

※預言(神の靈感を受けて、神のお告げとして話されたこと)